

祖父母の地

東京郊外で生まれ育った私は「地元」や「田舎」など土地に対して特別な興味や関心を持つことが無かった。しかし、今年に入り祖父母の中の最後の祖父が亡くなったことで、自分のルーツと微かに繋がっていた細い糸が切れたような感覚になった。

咄嗟に今やるべきことはこれだと思い、自分と繋がる地についての研究を始めた。

共に東京で生まれ育った同年代の父と母が幼少期の休みに、青森県と長野県にあるそれぞれの田舎に帰省して過ごした時間を辿り撮影をした。

どちらもいわゆる「田舎の原風景」であり特別な特徴があるわけではない。私と私の家族にとって大切に思い入れのある地であっても、誰もが通り過ぎる通り道のような、どことも似ている風景であることに残酷さや切なさを感じた。

その反面、ありふれた景色の一つであり、写真だけからはその背景を促すことはできないと言うことが自然であり、安心感を覚える。

あまりにも日常的すぎるからこそ、変わっていく風景を記録されないことに危機感を覚えそれをあえて提示することに意味があると感じた。

私とは直接的に関わりはないが、間接的に深い繋がりを持つ「地」を、外の眼とも中の眼とも言えない感覚で見つめてきた。

また、ルーツを辿り遠い親戚に会うことで、切れかかった繋がりを保つことが出来たと感じる一方で、生まれてしまった距離を現実的に感じることもあった。

数世代遡れば地方に同じような背景を持つ人は現代の都市生活者に溢れている。その失った背景を顧みず、意識の外に置いている人は多いのではないだろうか。